

接ベクトル空間

grad31415

2025/02/21

1 接ベクトル空間

1.1 速度ベクトル

M を m 次元多様体とし、点 $p \in M$ における接ベクトル空間を $T_p(M)$ とする。また、写像

$$f : M \rightarrow \mathbb{R}$$

と、多様体 M 上の曲線

$$c : [-\epsilon, \epsilon] \rightarrow M$$

を考える。ここで導入する速度ベクトル \mathbf{v} は、局所座標系に依存せず、 M 上の任意の関数 f に対して実数値を返す演算子として定義される。

具体的には、以下のように定義する：

$$\begin{aligned} \mathbf{v}(f) &= \left. \frac{d}{dt}(f \circ c)(t) \right|_{t=0} \\ &= \sum_{i=1}^m \left. \frac{dx_i}{dt} \right|_{t=0} \frac{\partial f}{\partial x_i}, \end{aligned} \tag{1}$$

すなわち速度ベクトルは

$$\mathbf{v} = \left. \frac{dc}{dt} \right|_{t=0} = \sum_{i=1}^m \left. \frac{dx_i}{dt} \right|_{t=0} \frac{\partial}{\partial x_i}.$$

ここで用いている $\{x_i\}_{i=1}^m$ は局所座標系であるが、この表現は任意の局所座標系で展開可能である。

また、接ベクトル空間は点 p での局所座標基底

$$T_p(M) = \left\langle \frac{\partial}{\partial x_1}, \frac{\partial}{\partial x_2}, \dots, \frac{\partial}{\partial x_m} \right\rangle$$

を生成系として構成されるため、明らかに $\mathbf{v} \in T_p(M)$ となる。さらに、簡単な計算により $T_p(M)$ がベクトル空間であることも示される。なお、局所座標系の変換（例えば $\psi^{-1} \circ \phi$ ）により基底が変わることも可能である¹。

¹参考：松本『多様体の基礎』 演習問題 9.1

1.2 関数 $f: M \rightarrow N$ の微分 df

M を m 次元多様体, N を n 次元多様体とし, 写像

$$f: M \rightarrow N$$

を考える. また, $\mathbf{v} \in T_p(M)$ および $\mathbf{w} \in T_{f(p)}(N)$ とする.

写像 f の微分

$$df: T_p(M) \rightarrow T_{f(p)}(N)$$

は, 曲線

$$f \circ c: [-\epsilon, \epsilon] \rightarrow N$$

に沿った速度ベクトルを用いて定義される. すなわち, 点 $p \in M$ における速度ベクトル \mathbf{v} に対して, 点 $f(p) \in N$ における速度ベクトル

$$\mathbf{w} = \frac{d}{dt}(f \circ c)(t) \Big|_{t=0}$$

が対応する. 局所座標系 $\{x_i\}$ (M 上) と $\{y_j\}$ (N 上), ただし $y_j = f_j(x_1, x_2, \dots, x_m)$ と表されるとき, 以下の例が成り立つ.

例 1.2.1

局所座標基底に対して,

$$df\left(\frac{\partial}{\partial x_i}\right)_p = \sum_{j=1}^n \frac{\partial f_j}{\partial x_i}(p) \left(\frac{\partial}{\partial y_j}\right)_{f(p)}.$$

証明: 点 p の局所座標表示を (p_1, p_2, \dots, p_m) とし, $\mathbf{v} = \frac{\partial}{\partial x_i}$ とする. このとき,

$$\mathbf{v} = \frac{dc}{dt} \Big|_{t=0} = \sum_{k=1}^m \frac{dx_k}{dt} \Big|_{t=0} \frac{\partial}{\partial x_k}.$$

曲線 $c(t)$ の座標表示は

$$c(t) = (p_1, p_2, \dots, p_{i-1}, p_i + t, p_{i+1}, \dots, p_m)$$

となるので, $\frac{dx_k}{dt} \Big|_{t=0} = \delta_{ik}$ である. したがって, $f \circ c$ に沿った速度ベクトル \mathbf{w} は

$$\begin{aligned} \mathbf{w} &= \frac{d}{dt}(f \circ c)(t) \Big|_{t=0} = \sum_{j=1}^n \frac{dy_j}{dt} \Big|_{t=0} \frac{\partial}{\partial y_j} \\ &= \sum_{j=1}^n \sum_{k=1}^m \frac{dx_k}{dt} \Big|_{t=0} \frac{\partial f_j}{\partial x_k}(p) \frac{\partial}{\partial y_j} \\ &= \sum_{j=1}^n \frac{\partial f_j}{\partial x_i}(p) \left(\frac{\partial}{\partial y_j}\right)_{f(p)}. \end{aligned}$$

これにより示された.

例 1.2.2 (Jacobi 行列)

局所座標基底で任意のベクトルを

$$\mathbf{v} = \sum_{i=1}^m v_i \frac{\partial}{\partial x_i}$$

と表すとき、その微分

$$df(\mathbf{v}) = \mathbf{w} = \sum_{j=1}^n w_j \left(\frac{\partial}{\partial y_j} \right)_{f(p)}$$

は、各成分が

$$w_j = \sum_{i=1}^m \frac{\partial f_j}{\partial x_i}(p) v_i$$

と表される。

証明: df の線形性より、

$$df\left(\sum_{i=1}^m v_i \frac{\partial}{\partial x_i}\right) = \sum_{i=1}^m v_i df\left(\frac{\partial}{\partial x_i}\right).$$

例 1.2.1 より、

$$df\left(\frac{\partial}{\partial x_i}\right) = \sum_{j=1}^n \frac{\partial f_j}{\partial x_i}(p) \left(\frac{\partial}{\partial y_j} \right)_{f(p)}.$$

よって、

$$df(\mathbf{v}) = \sum_{j=1}^n \left(\sum_{i=1}^m \frac{\partial f_j}{\partial x_i}(p) v_i \right) \left(\frac{\partial}{\partial y_j} \right)_{f(p)},$$

すなわち各成分は

$$w_j = \sum_{i=1}^m \frac{\partial f_j}{\partial x_i}(p) v_i.$$

これで示された。

ここで、 $\frac{\partial f_j}{\partial x_i}$ は Jacobi 行列の成分と呼ばれる。また、逆写像の定理より、Jacobi 行列の行列式が 0 でないとき、 df は微分同相写像となり、 $T_p(M)$ と $T_{f(p)}(N)$ は同相であることが分かる。